

聖  
王  
グ  
ロ



*Adult only*







# 目次

表紙	イラストレーション	流一本	
中扉	イラストレーション	流一本	
目次			2
こみつく だだもれ (ガールズ&パンツァー)		流一本	3
SS セーラー服と鬼娘 (Re:ゼロから始める異世界生活)		白朧	15
あとがき&奥付			

あ…あの

ダーズリン様  
これは一体どういう  
ことなのでしょう

ローズヒップ

聖グロリアーナの  
生徒として  
ふさわしい  
女性に  
なりなさいと

はっ…はい！

ですから  
今からそれを  
教えてさし  
あげます

あなたには  
常々言っ  
てきま  
したね

なぜ学園に  
殿方が  
こんな  
も…？

え？







こんなには股を広げない子

あ…あのダーズリン様？

?  
?  
フフ

ひゃ!?



やっ…  
ダーズリン…さ…

?

んあ!

ああん!



これは…  
夢ですの？

や…

んん

あっ

あっ

こん…な…  
殿方…に…  
見られ…て



あひ♡

んああ！

私の…  
アソコ…を



ひあ！



あ

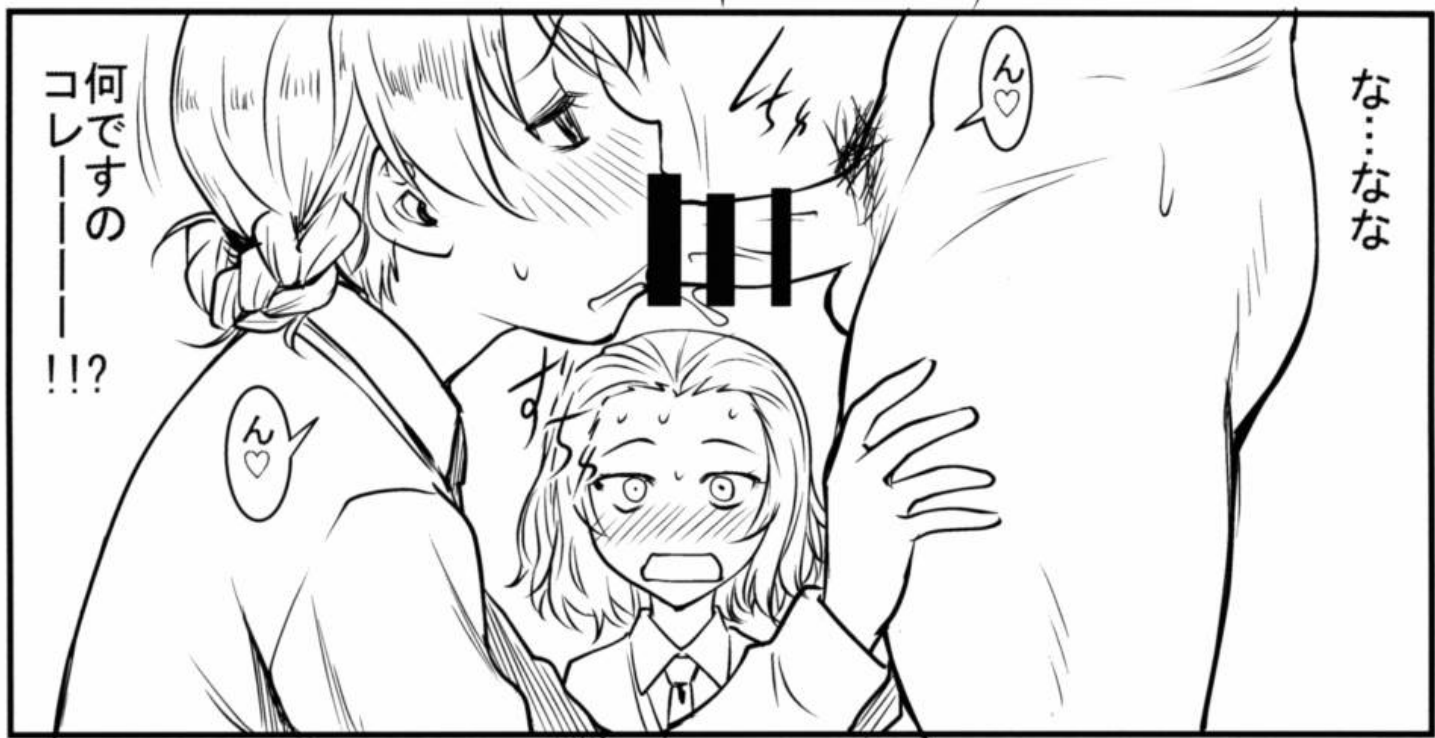
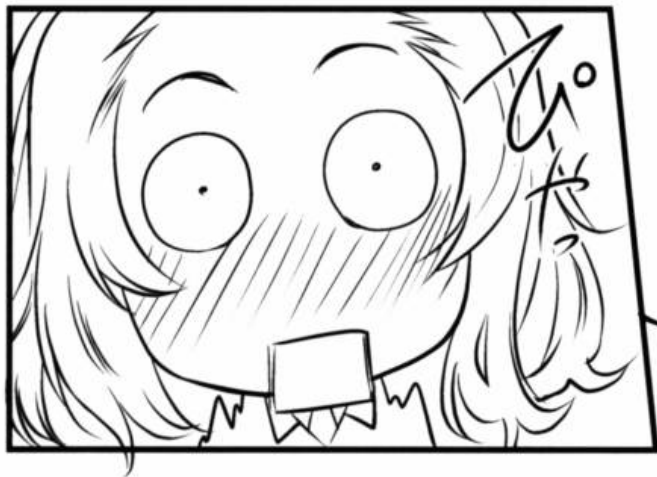
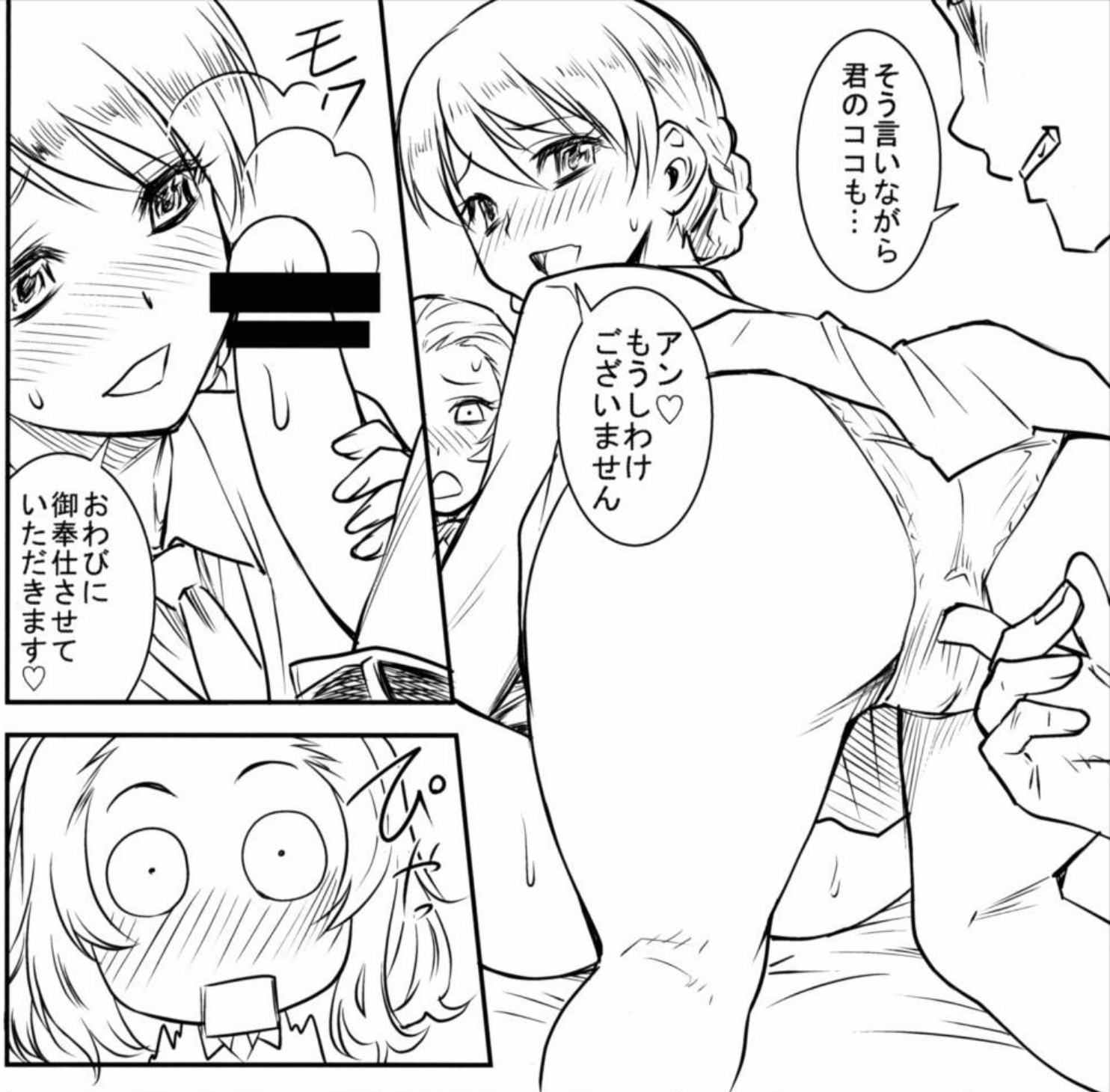
ダー…  
ジン様



お豆さん…  
を固く…  
おんなん…  
を固く…  
させる…

本当…  
に…  
ない

ダー…  
ジン様あ







いないんですわ



フひい  
エよっ  
とこ  
ら顔だ  
な



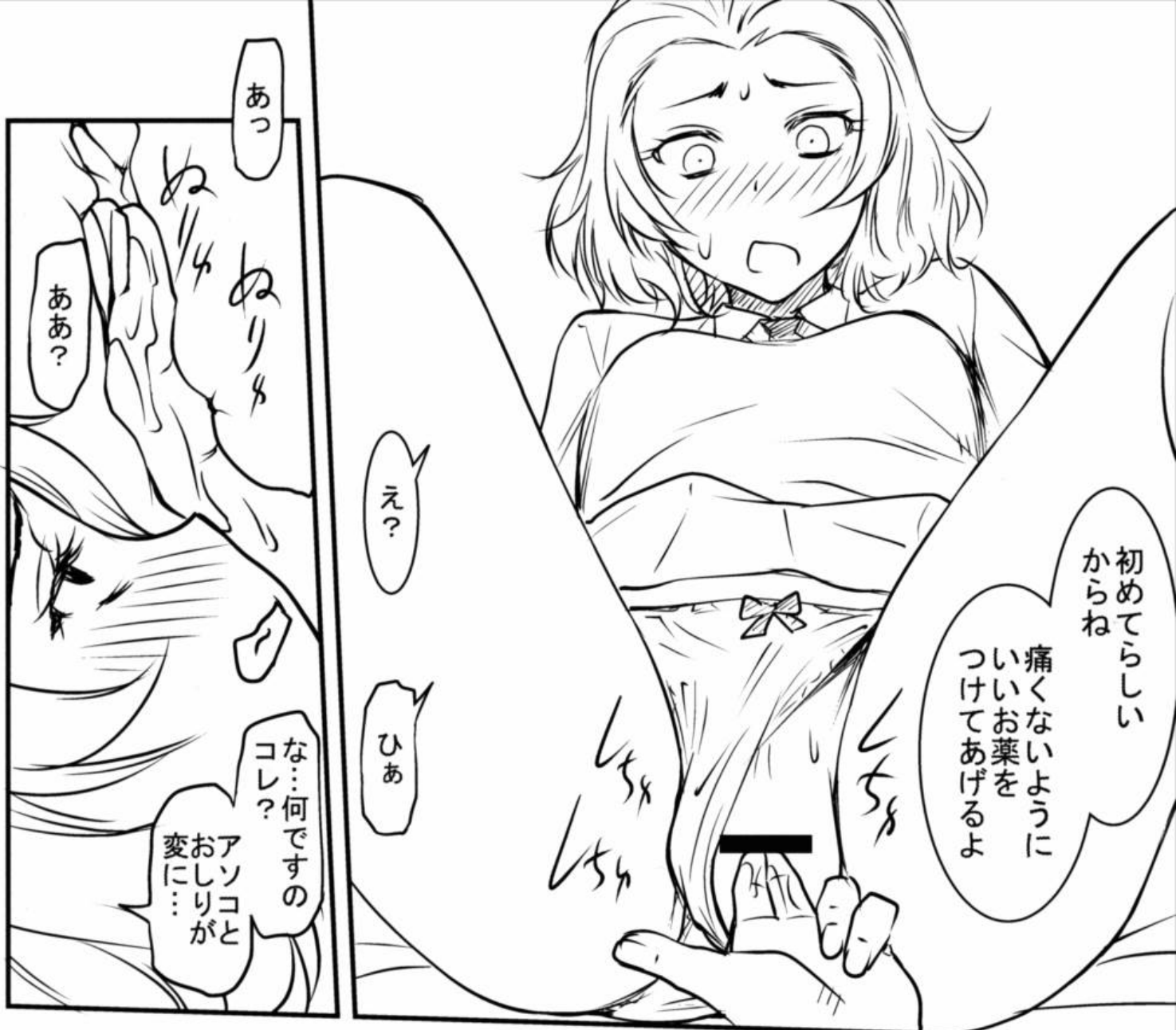
ダー  
ジリン  
様  
が  
おち●  
ぽ啜  
えて  
あんな  
表情を  
:



君も  
すぐ  
あんな  
風に  
なれる  
よ



まだ  
まだ  
射<sup>だ</sup>  
精<sup>だ</sup>  
し足  
り  
ない  
ので  
しよ  
?



初めてらしい  
からね

痛くないように  
いいお薬を  
つけてあげるよ

え？

ひあ

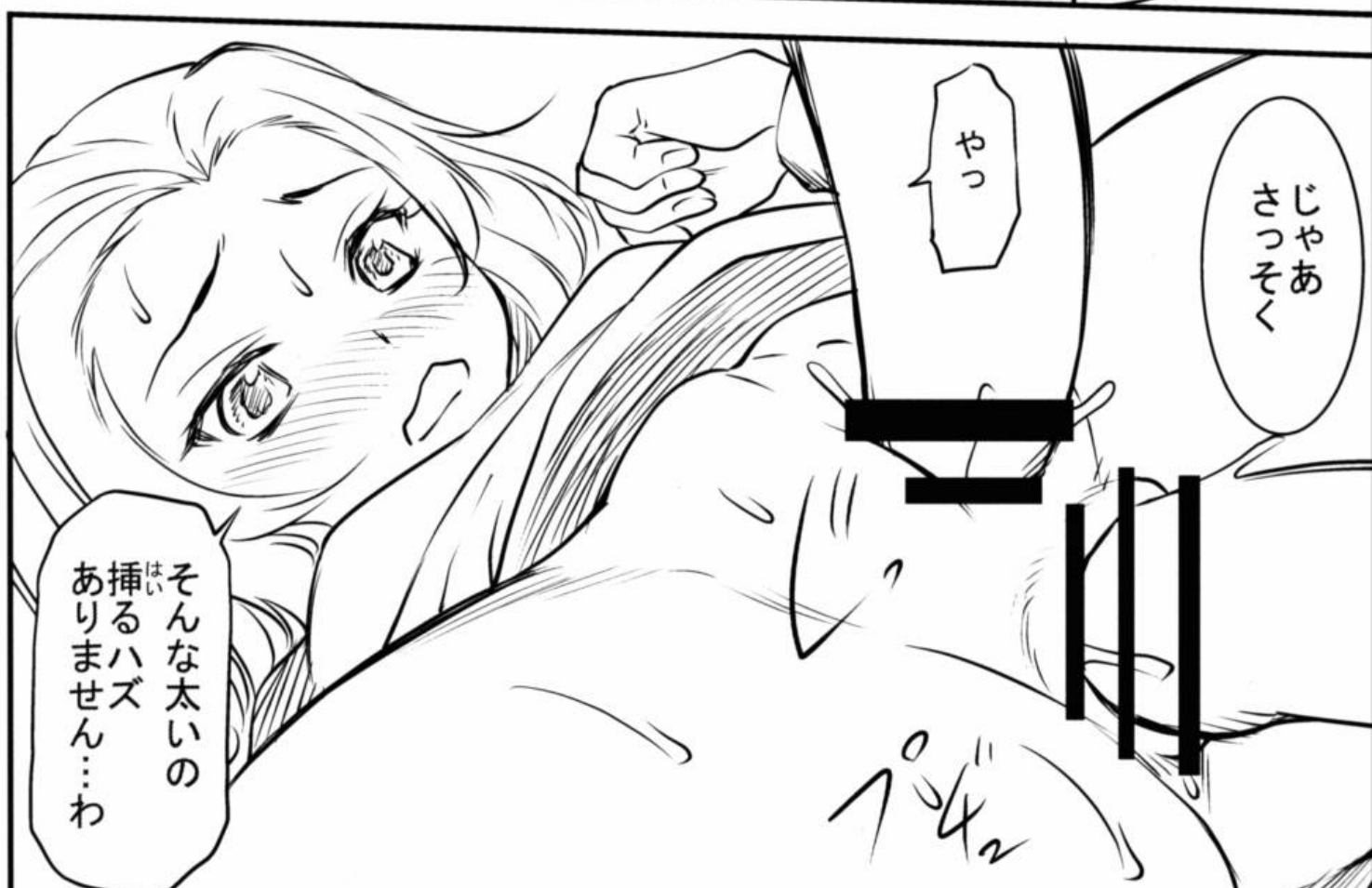
あっ

ぬ  
ぬり

ああ？

な…何ですの  
コレ？

アソコと  
おしりが  
変に…



じゃあ  
さっそく

やっ

そんな太いの  
は挿るはず  
ありません…わ

1042

んっ♡

失礼いたし  
ますわ

イキナリ  
二本同時とは  
さすがだね

ア…ア♡

ハアア♡

あ—♡











お腹の中が  
ものすごく  
熱いですわ♡

紅茶はこぼさ  
なくても  
ザーメンは  
こぼすんだね

ああん  
ごめんなさい♡



あっ…ああ  
いいですわあ  
もっとおわあ♡

リミット  
外れちゃい  
ますわ♡

オホオ♡

オイオイ  
お嬢様がそんな  
うなり声で  
いいのか？

ンオオツ♡







んああ♡

もっとおち●ぽで  
ぐちゅぐちゅして  
欲しいですわ♡

ダメよ  
ローズヒップ

おねだりする  
のならもつと  
穴の奥までよく  
見えるように  
なさい

ハイ：  
ですわ

ああ  
ローズヒップっ  
たら

あんなに  
おち●ぽ美味し  
そうに啜えて

後でたっぷり  
おしおき  
しなくちゃ♡



## セーラー服と鬼娘

「あの……、スバルくん」

レムがそつとドアの影から顔を覗かせて来た。

「着替えました」

ドアから現れたのはセーラー服に身を包んだレムであった。スカートは無論膝丈としている。

「おおーッ、実に似合うなレム」

スバルはレムの姿に手放して喜んだ。裁縫スキルを駆使して一週間の苦勞の甲斐があったというものである。気温が高まりつつあったので夏服をチョイスした自分を褒めてやりたい、すらりと伸びる二の腕が実に扇情感を出している。

「これがスバルくんの故郷の衣装なのですね」

「そうッ、そのセーラー服は水上で戦う人たちが着ていたと言われる由緒正しきものなのだよ」

言いながらスバルはレムの周りをエアカメラしながら回り始める。

「流石は俺のレム、どんな角度からでも絵になるなあ……、おつとつとつ……」

脚を絡ませてしまいスバルはバランスを崩す。

「スバルくんッ」

すばやく反応したレムに支えられ、その胸に顔を埋めた。レムの香りが鼻腔をくすぐってくる。

レムの髪からは優しい香料の匂いがした。レムの甘い体臭と混ぜり合って、男を魅了する匂いを放っていた。

「スバルくん……」

セーラー服に籠もったレムの体臭が悩ましく香る。

「レムが欲しい……」

「レムはスバルくんが喜ぶなら何でも出来ますよ」

豊満な胸を押し付けられていたら、スバルの欲求は一つしか考えられなかった。

「パイ……、えつと、胸で擦ってくれ……」

パイズリという単語が理解できるか判らなかったので曖昧ながら内容を口にする。

「……はい、判りました」

レムはスバルの言った言葉を理解したようで、少し恥ずかしいのか頬を高揚させて頷く。

可愛い顔立ちに豊満な肉体、手足はすらりと無駄な肉付きはないが女性らしい柔らかさを保っている。

「スバルくん、座ってください」

レムからの指示のままベッドに腰掛けると、レムがスバルの脚の間に身体を入れてきた。足を畳みセイラーを捲くって胸を露出させる。

押し込められていた乳房は、その弾力を魅せつけ揺れながら飛び出してくる。

スバルはその量感のある乳房に圧倒された。先端の小さな乳輪と小さな乳首が誘うように揺れている。

レムはゆっくりとした手つきでスバルのジャージを下げしていく、外気に晒された影響で半勃ちしていた男根がゆっくりと勃ち上がる。

「スバルくん、元気ですね……、可愛いです」

「レムの胸が魅力的だから……だよ」



「スバルくんに褒められて嬉しいです」

レムはひんやりした指先でペニスを優しく愛撫していく、下乳を支えながらペニスを挟むように左右から押さえつける。

「うう」

「んッ、んんッ、んッ……、はあはあッ」

レムは甘い声を上げながら、乳房の脇に手を当てて自分の乳房を揉みしだいている。

ふっくらとした稜線を描く乳房の谷間から顔を出した龟头と小さな二つの乳首が、レムが揉みしだくたびに震える。

スバルはレムに包まれているという充足感が高まってくる。

「あ、……はあッ、ん、んッ、んんッ」

レムは息を弾ませながらスバルへと奉仕を続けた。レムの軀にもパイズリによる疼きが咲き乱れていた。

「んッ、あああッ……はあはあ……、んッ、んんッ……」

レムは発生した疼きを散らそうと、乳首を人差し指で押さえながらきつく揉でいく。

「はあはあ……、ん、あああッ……ん、あああッ」

散らそうとした疼きは下腹部へと伝播して更に強力な疼きを与えてきた。

レムはスバルの反応が観察しようとして顔を上げる。スバルは顎を上げ我慢しているような反応をしていた。

「スバルくん、気持ちいいですか？」

「ああ、いいよ。レムに包まれてホッとしてる」

レムはスバルの反応に歓喜してしまふ。乳房から顔を出している龟头に舌を這わせ、先走り液を舐め取っていく。

「うッ」

不意打ちにスバルが声を上げ、咄嗟に身体が反応して腰が動いてしまふ。

「きゃッ」

その動き対応できずに乳房で固定していたペニスが前後に跳ねて、白い液体を吐き出した。

レムの鼻先や頬に白く穢していく。

「わ、悪いレム……ッ」

スバルは自身が為した結果に慌ててしまふ。

レムを襲った白濁液は、レムの顔と肌そして制服を穢していた。恍惚とした表情のままレムは口を開き、口腔内の赤と肌の白さが艶かしさ際立たせる。そのままスバルの男根を飲み込んでゆく。

「ううッ」

滑りを帯びた口腔の感触が刺激を伝え、必死に止めていた射精の勢いが激しくなる。

レムの舌が射精途中の龟头を舐めあげ、舌の裏が龟头と接触する。口腔内に精液を留めて置く防壁となった。

セーラー制服が精液で汚れてしまったのが気になった。

スバルの男根からは呆れるほど大量の精液が放出されていく。唇から溢れて落ちてくる白濁液とレムの恍惚の表情にスバルの劣情がさらに刺激される。

「うッ、ううッ……、くッ」

射精が終わり、スバルはレムの口腔内より男根を引き抜く。

レムは手で口を押さえると少しおとがいを反らせ口腔内に留まった精液を嚙下する。

「ちよつと苦いですね」

レムの率直な感想にスバルは申し訳なきが募る。

「す、スマンッ」

「平気ですよ、スバルくんの精液です。レムはいくらでも飲んで

しまいます」  
そう言いながらレムは顔に掛かった部分とハンカチで集め、その

精液も舌でゆつくりと掬い飲み込んでいく。

その一連の行動を見ていたスバルの男根はレムの妖艶さに力を取り戻し始める。

力を取り戻してきたスバルの男根を見ると、レムはスバルにしな垂れ掛かりベッドへと折り重なっていく。

自らスカートの中のショーツを抜き取り、スバルの上へ跨ってしまふ。レムの意図は明らかだった。

「スバルくん……、レムはスバルくんが欲しいです」

スバルの男根は瞬時に臨戦態勢まで力を取り戻す。白い手で自らの秘所にあてがうレムは口元に微笑を浮かべる。

「うッ」

秘部を下から覗き込む状態なので、蕾が綻んだ大陰唇や膨張したクリトリス、存在を主張する立派な双丘もが一望に出来た。

レムが腰をまわし、位置を合わせゆつくりと腰を下ろしてきた。

「うッ、ううッ……くッ」

スバルの男根が、温かく滑った膣壁に吸い込まれていく。龟头が子宮口を押し上げ最奥まで結合させた。

「はぁッ……」

レムが息を吐いたが、すぐにスバルの男根を締め付け始める。

「あッ、あああッ、ス、スバル……くんッ」

レムは甘い嬌声をあげながら悶えていた。スバルの男根を受け入れて、子宮口を押し上げられて、さらにスバルと深く繋がりがたくて、その腰はより深く繋がるように動いていく。

レムは乳首に疼きを感じ自らの手で揉みしだき始めた。快楽に惚けた表情を浮かべ、口の端からよだれが垂れる。豊富な乳房を持ち上げると顎を引いて乳首に舌を這わせ舐めまわす。舌の柔らかく温かい感触が心地いい。

「あああん、スバ……ルくうんッ、い、いいですッ」

甘い嬌声をあげながら腰を揺らし男根をより深く求める。子宮の疼き、甘い痺れるような心地よさに溺れていく。

快楽に浸るレムの妖艶さに興奮したスバルが、下から腰を押し上げてきた。子宮口を龟头で押し上げられレムは甘い悲鳴を上げて腰を調整する。

「きゃんッ」

「うッ、れ、レムう……、もつとッ……」

レムはスバルが自分を求めている姿に喜びを覚える。深くレムを求め身悶えるスバルをさらに愛そうと体性を変える。膝立ちになり、膝を使って腰を前後に動かしていく。

レムの溢れ出る愛液が奏でる音が静かな室内に響いていく。

「あッ、あああッ、んッ、……んんッあああッ……、スバルくんッ、スバルくうんッ！」

スバルが下から腰を突き上げてくるために、レムが臀部を動かすスピードは激しくなっていく。合わせて二つの乳房が艶かしく揺れる。

「あああんッ、んッ、スバル……くんッ……」

激しくなっていく粘着音と寝台が軋む音、そしてレムの嬌声が室内に広がって、男を興奮させる音楽となっていく。

結合が深くなる騎乗位でレムの膣内の快楽スポットを抉っている。突き上げられる勢いで上半身のバランスが危うくなる。

「ダメですッ、……感じ……過ぎて……しましますうッ」

このまま絶頂へ昇るのが怖くなったレムは腰を浮かせて結合を緩め、一旦快楽を逸らして一息つこうとした。

「ああ……、レムう……レムうッ」

突然スバルが抱きついてきた。レムが腰の動きを一時止めたために快楽を求めてレムに縋りつく。

スバルはレムの手を握り、自分に向けて引っ張っていく。

「きゃッ」

スバルの身体を覆うようにレムの身体が倒れていく。そのままレムの身体を抱きペニスは挿入したまま巻き込むように回転する。

「ス、スバルくん……、何を……」

レムが咄嗟にバランスを取ったために、結合していたペニスが出来、そのままレムは寝台から落ちそうになる。

「ああッ……」

うまく膝をつきバランスを取るものの、上半身は寝台に伏せるような格好になり、ちょうどスバルに向けて尻を突き出した体勢となる。

「ああ……、はあッ、はッ、はッ」

スバルはレムの躰に縫り、後ろからレムの躰へと覆いかぶさる

「レム……レムッ！」

「はい……、レムの躰はスバルくんのもです」

スバルの中に支配欲が灯り、軽くレムの臀部を叩く。数回繰り返して叩く。

「ひゃあんッ！」

甘えるような悲鳴をあげ、なおもスバルか叩いていく。アナルが痙攣するかのようにつつき、秘唇からは愛液が零れ落ちる。

「ス、スバルくん……、スバルくんッ」

ねだるような甘い声をあげ、レムはスバルを求めていた。内に籠もる疼きに耐えられなくなってきた。

「レムッ」

スバルが男根を蜜で溢れる秘所へと挿入する。

「あッ、あああああッ、いいですッ！」

騎乗位の下で悶えるスバルを見るのも好きなのだが、レムには騎乗位より後背位の方が、スバルに求められてる感じがして好ましい。

スバルは激しくピストンを繰り返す。臀部を這うスバルの手がレムの尻穴に触れる。

「きゃッ、スバルくん……、そこはッ……」

アヌスをゆつくりと指を這わせ、その指を挿入し探るように動かす。

膣にペニスが入っているために圧迫され、男根の大きさを強調させてくる。

スバルが臀部を再度叩く。

「あああッ！」

レムは背中を震わせ悲鳴をあげる。同時に締め付けが強くなり、高まった射精欲求を何とか押さえ込む。

スバルは亀頭で子宮を刺激しながら、尻穴に入れている指を二本に増やす。

「ああああッ！ スバルくんッ！」

直腸粘膜に沈んだ指を広げ、小さくすぼまった尻穴を押し広げていく。

「……ス、バルッ、くんッ、そこは……ッ」

「お尻を弄られて悶えるレムは可愛いなあ」

スバルは内に高まった嗜虐欲求に従い、さらに指を一本追加し、奥へと差し込んでゆく。

「あああああッ、あッ、あうッ、はああッ」

尻穴が十分にほぐれたのを確認し、指を引き抜く。アヌスは先ほどまでとは比べ物にならないほど広がっていた。

スバルは膣からペニスを引き抜くと、レムの愛液で濡れそぼった男根を尻穴に押し当ててみる。レムの腰をしっかりと保持し、亀頭をアヌスに突き入れていく。

「んッ、くんッ、あああッ！」

男根がゆつくりと尻穴にへと沈んでいく。



直腸粘膜が蠕動して侵入してくる異物を拒んでくる。狭く硬く滑るような直腸粘膜は臆とは異なる快楽だった。

「ス……ッ、バルッ、くんッ、はぁんッ」

異物感に耐えているのである。レムから狂おしげな声が発せられる。

「苦しいか……、レム？」

「く、くるしいですッ、でも……、それ以上に嬉しい……です」  
レムは異物を受け入れ、軀を震わせながらも、スバルに喜びを伝える。

ゆっくりと異物を後退させ始める。

「あぁん！」

レムへの負担に気遣いゆっくりとした律動を行う。半ば抜けかけていた男根が急激に締め付けられていく。

何度か繰り返すうちにレムの腸壁も慣れていった。

スバルが動きを激しくし、その度にレムの臀部から背筋、脳髄へと快感の電流が流れる。脳髄を揺るがすようなショックが襲ってくる。

直腸粘膜は温かく男根を包み、ペニスに痛みを感じさせるほど強く締め付ける。臆壁の感触とは全く異なる快感をもたらしていた。

「うッ、ふッ、はぁッ」

スバルは全身から汗を滴らせながら男根を前後させていた。射精欲求が内に高まっていく。

「あぁッ、あッ、ス、バルくんッ、んんあッ」

ふつくと女性らしさを持つレムの肢体が小刻みに震える。捲くれ上がったセーラー服から見える肌は高揚し汗を浮かべている。

背後からレムを貫いてる様は征服欲が満たされていくようだった。

「何か……、光ってッ、もう……、スバ……ルくんッッ！」

レムの絶頂が近いと察することが出来た。スバルの腰でも熱いものが滾り限界が近かった。

「レム、うッ、も、もうッ」

「スバルくん、い、一緒に……」

レムの軀がさらに激しく震える。

「イクッ、イクッ！」

レムが背中を弓なりに大きく反らし硬直した。直腸粘膜が激しい熱を帯び、キツく締まる。

それが引き金となり、体内の熱い塊が出口を求めて這い上がった。きた。

「うッ、で、出るッ！」

スバルはより深く男根を沈め、レムの腸内へ塊を解き放った。信じられないような量がレムの腸内に注がれる。

レムは腸内に出されたスバルの精液を感じると幸福感で満たされていく。

自分の軀は全てスバルのモノとなったことがとても嬉しかった。射精で力が抜けたスバルの体がレムの体に被さってくる。その重みもレムには心地よかった。

このスバルを支え、包み込み、共に歩くのがレムの望みなのだから……。

終幕

## あとがき (&グチ)

くろうさぎ このたびはお買い上げありがとうございます。  
白朧 コウチャッチャーッ!  
くろうさぎ ティーパックーン!  
流一本 なんだその掛け声?  
白朧 ラムネ&40の紅茶どもです。今回は紅茶と聞いてたので。  
流一本 ダーゼリンだよ!  
白朧 劇場版何回行ったの?  
流一本 四回かな、たぶん少ない方だろ。  
くろうさぎ よく行ったな。私、シン・ゴジラが気になります!  
白朧 劇場までの距離が問題だわ。  
くろうさぎ 確かに遠い場合が多いからな。近いといいんだけど。

8月某日  
溶岩島でアルバトリオンと戯れ中

## 奥付



発行リーフパーティー  
2016/8/14  
くろうさぎ

ホームページアドレス  
<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 大陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載  
インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止

*LeLe!まごま*

**VOL.29**